

5

近代日本の海外展開における第一歩としての
日本人ペスト調査団海外派遣

大山 卓昭

国立感染症研究所 感染症情報センター

【背景】 ペストと認められる疾患は人類の歴史に計り知れないほどの影響を及ぼした。6世紀頃の東地中海地方でペスト流行により多くの都市が無人化し、14世紀の中世ヨーロッパではその当時の全人口の1/3~1/4がペストの犠牲になったと言われている。19世紀後半にはペストの流行が中国南部に始まり、当時の国際貿易の拡大および帝国主義の波に乗って、世界規模の流行に発展した。

この19世紀ペスト流行の際、日本政府は「ペストを研究することが人類に対する義務」として、隣接する中国におけるペスト流行に対して、日本人ペスト調査団を派遣した。第1回目は明治27(1894)年の香港におけるペスト流行、第2回目は明治32~33(1899-90)年に营口(牛莊)におけるペスト流行、である。

【目的】 日本が近代国家として確立していく歴史的基盤の中で、日本人ペスト調査団海外派遣の活動を評価し、その後の帝国主義的海外展開の中での位置づけを考察する。

【方法・資料】 日本人ペスト調査団海外派遣の活動・成果を振り返り、さらに、当時の日本の置かれた社会的背景を考察することにより、それらの活動の位置づけを考察した。北里柴三郎『「ペスト」病調査復命書』、青山胤通『香港ニ於ケル「ペスト」調査ノ略報』、岡崎祇照『牛莊防疫紀行』、飯島渉『ペストと近代中国』等を主な資料とした。

【結果・考察】 明治27(1894)年に香港で流行したペストに対して同年6~8月に日本人調査団が派遣された。この調査団については、明治政府初の海外調査団であり、北里柴三郎(伝染病研究所)および青山胤通(東京帝国大学医科大学)の活動、特に北里らによるペスト菌発見(同時期にパスツール研究所のイェルサンもペスト菌発見)が有名である。青山らはペスト罹患で生死の淵をさまよいつつも、多くの臨床症例所見を収集して、その成果を報告している。一方、明治32~33(1899-90)年の营口(牛莊)で流行したペストに対する日本人調査団については、彼らの現地活動時期明治32(1899)年10月~明治33(1900)年4月には、ペスト流行のピークはすでに過ぎ、有益なペスト調査が実施できたとは言い難い。

この時期の日本の置かれていた状況としては、明治10年代コレラ流行を乗り越え、近代国家としてなんとか「防疫」が制度化され、衛生行政確立途上の段階であった。また、海外留学から戻った北里ら研究者たちの活躍で、日本にも細菌学興隆の波が押し寄せてきたところであった。さらに、安政5(1858)年の不平等条約(日米修好通商条約)により制限されていた検疫権を条約改正により回収する途上であった(明治32(1899)年検疫権回収)。このような状況の下、近代日本が欧米列強諸国に対抗し、まず東アジアそして更なる海外展開の第一歩を築くために、「人類に対する義務」を謳いあげて、地理的に隣接する中国でのペスト流行に日本人調査団を派遣することは、近代日本の「防疫」の制度化および衛生行政の確立を示し、それらを世界にアピールするのに適した機会であったと言えるであろう。

さらに、その後の日本の海外展開を考慮すると、この時期の日本人調査団の活動は、日清戦争後日本が台湾において初めての植民政策施行の際、現地社会への浸透をはかる有用なモデルとなっていたと考えられる。そのことは、台湾植民政策において有名な総督府民政長官後藤新平の「文装的武備論」にもつながるものである。また、日露戦争後の関東州租借地及び満州進出の際にも、植民政策の一つのチャンネルとして利用されたと考えられる。